

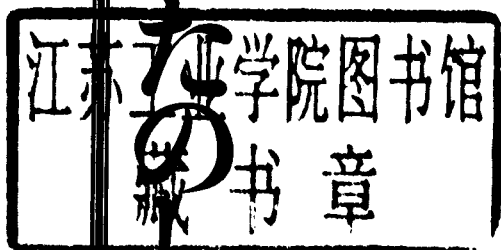
幸福の鍵
478

運命を
たのしむ

曾野綾子
Ayako Sono

幸福の鍵
478

運命を
な
の
し
む



百野綾子
Ayako Sono

〈著者略歴〉

曾野綾子（その あやこ）

作家。昭和6年東京生まれ。聖心女子大学を卒業後、第15次新思潮に参加、文壇にデビューした。大型才女として一時代を画し、以後数々の問題作、話題作を発表しているが、とくにエッセイ『誰のために愛するか』は二百万部を超す大ベストセラーとなっている。最近の主な作品には『無名碑』『神の汚れた手』『天上の青』『夢に殉ず』『燃えさかる薪』『神さま、それをお望みですか』『近ごろ好きな言葉』などある。夫君は、作家三浦朱門である。

1993年、日本芸術院恩賜賞、1995年、日本放送協会放送文化賞を受賞する。

運命をたのしむ

幸福の鍵
478

平成九年二月十八日 第一刷発行

平成十年七月二十日 第九刷発行

著者 曾野綾子

発行者 下村のぶ子

発行所 株式会社 海竜社

東京都中央区築地二の十四の一 〒一〇四—〇〇四五

電話 東京（〇三）三五四二—九六七一（代表）

振替 〇〇一一〇—九—四四八八六

もし、落丁、乱丁、その他不良な品がありましたら、おとりかえします。お買い求めの書店か小社へお申しください。

印刷所 新協印刷株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

©1997, Ayako Sono, Printed in Japan

《幸福の鍵
478》

運命をたのしむ

数年前、『失敗という人生はない』という本を作って頂いたのに続いて、今回のこの『運命をたのしむ』という本が生まれた。作家が書いた小説やエッセイの中から、ちらと本音が出ている部分だけを集め、形を整えるという形は昔からよくあるのだが、いずれにせよ、出版の裏方の、綿密で心のこもった作業がなければできないものではない。

私はできるだけ人には見えないようにして卑怯な人生を送って来た。運命に流されっぱなしでもなかったと思うけれど、敢然と抵抗を辞さず、投獄されたり、怪我をしたりしたこともない。

私が少し抵抗して来たのは、約二十年前まで産経新聞社を除く全中央紙が罹患^{りかん}していた「社会主義だけが人道的なのだ」という熱病のような統一思想と、現在もまだ続いている差別語を楯に言葉狩りをするマスコミの言論弾圧に対してだけである。

私は人間は、いろいろなやり方でいいことをするなあ、と感じているので、社会主義だけがヒューマニズムだという考え方には染まったこともなかった。

差別語の方は、今でもひどい。私たちはすべての言葉を使用できるのが「権利」である。それが自由の基本精神だろう。その自由に使える言葉をどう使うかは、私たちの個人の選択で、読者の方もそれによって筆者の人間を推しはかればいいのである。しかし、今でも読売新聞は、「開かれた言論」「報道の自由」どころか、言葉狩りをし続けている新聞だから、私は取らず読まずで読売新聞というものの存在と無縁になって久しい。

しかしすべての出来事は、大したことではないのである。私が大新聞の総てに干されていた頃、週刊誌や月刊誌はいつも私を庇^{かば}ってくれた。私はいざとなったら畑でおイモを作って生きる、と口先だけで威勢よく言っていたが、まだおイモ専門の作家にならなくて済んでいる。つまり私は狡^{ずる}く、卑怯に、決して深い傷を受けるような戦いなんかはしなかったのである。

狡かったという自覚も悪くはない。そうでなかった人にいつも深い尊敬を覚えられるからだ。

少し抗して、後は流されて、という私の川くだりは、基本的に楽なものだから、兩岸の岸辺の花も緑も、心に染みるように眺められるのである。

一九九七年一月

曾野綾子

目次

まえがき ————— 2

人生を成功させるとは

悲しくて明るいところ ————— 10

ベターの幸福 ————— 18

不幸も私有財産である ————— 25

魂の生を全うするとは? ————— 31

苦しみも一つの恵みである ————— 35

弱さは強さへの足がかりである ————— 41

運命を受け入れる時、人は運命を超える

人は、誰も唯一無二の運命を受諾して生きるしかない ————— 48

流されることを愛しなさい ————— 54

運命を使いこなすこつ ————— 59

損な立場がとれる時、人間は人間になる ————— 64

人間は間違いつつ正しさを模索し、受けながら与える ————— 68

正義を振り回すと、真実が見えなくなる ————— 72

思想とは存在そのもの ————— 78

愛することは生きること

人間が最後の瞬間に必要なものは愛だけである ————— 84

愛はすべてをそのまま抱きこむ ————— 88

愛は人を造る ————— 95

幸福の鍵 ————— 100

友情に必要なのは深い感謝と尊敬である ————— 106

老年の幸福 死の意味

最後の働きをしたい ————— 114

老年の特権——120

病む時も健康な時も共にその人の人生である——129

死はたった一度の優しい精神の独立の時である——135

すべてのことには終わりがある——142

時は縮まっている——150

神の束縛は人間を自由にする

信仰はマイナスをプラスにする力を与える——156

神の贈り物——163

すべての人は神の子であり、神の作品である——170

裁きは神に任せなさい——176

恐れを知る者にならなければならぬ——181

神はすべての人の中にいる——185

人間の原点を問う

作家としての筋の通し方——192

教育の第一責任者は自分である——199

私に責任を負える人は私しかない——203

人間の生活の原点——208

貧乏も富も人を縛る——216

汚い金ほどきれいに使う技術と温かさが必要ならなければならない——220

人間は一人一人異なった賜物をもらっている

個人の才能は神から無料で貸し出されたもの——226

個人的な実力をつける——232

互いに重荷を担い合う——237

善から学ぶが、悪からも偉大なものを学ぶ——241

ほどほどの悪と共生して生きる——245

深く謙虚に不純な人間に——251

人間のルール 社会の原則

勝者もなく、敗者もなく収める——256

平和はかりそめのものである——260

文明か自然か——266

援助は冷静さと意志によって持続する——274

どこかにあることは、すべてどこにでもある——278

著作リスト——283

ブックデザイン——久保和正

人生を成功させるとは

悲しくて明るところ

人生の限度を自ら知って自分らしく生きるといふ知恵は、学問にも知性にも権勢にも財力にもほとんど関係がない。しかしそれほど端正な姿勢はない。
(流行としての世紀末)

†

「私ね、このごろ思うんだけど、愚かさでも、執念でも、誠実でも、悪意でも、何でもいいから、できるだけ濃厚にやり遂げることなのね。そうすれば死ぬ時、納得がいくような気がする。はた目を気にして、自分のしたいことをしないでいると、死ぬ時、誰かを恨みそうな気がするの」

「そうですね。私も子供の頃の生活を恨んでいました。だからそれを持ち越すと、一生陰惨な思いでいることになるでしょう？ 私、それがいやだったんです。ですから、その場その場で一番したいと思うことをすることにしたんです」
(燃えさかる薪)

†

人生の一時期、人間は計算を離れて、愚かなことをすればいいのだ。(近ごろ好きな言葉)

†

私を含めてほとんどの人は、「ささやかな人生」を生きる。その凡庸さの偉大な意味を見つけられるかどうかが芸術でもあり、人生を成功させられるかどうかの分かれ目なのだ。

（神さま、それをお望みですか）

†

私の記憶にある限り、私は現世を幸福な場所だと思ったことがなかった。それは「空気のような、何気ない悲しみ」に満ちている所だった。ただし私の悲しみは決して劇的ではなかった。しかもそこは私にとって決して暗黒に閉ざされている空間でもなかった。どんなに絶望的な時代でも、私には明るさが与えられていた。

そのことを——私はどれほど感謝しているか知らない。だから私の生きて来た所は「悲しくて明るい場所」だったのである。

（悲しくて明るい場所）

†

人よりでしゃばらないこと、功績を人に譲ることができること、黙っていること、密かに善行をなすこと、自分の持っているものを見せびらかさないこと、などは、すべて力のない人にはできない行為なのである。そしてそれらのことが気品とか品位とかの本質になっている、と私は思う。

（悲しくて明るい場所）

†

人がするからいい、のではないのである。人がしてもしないし、人がしなくてもする、というのが勇氣であり品位である、と私は教えられた。しかしそういう教育をしてくれる人に出会うことはめったになくなった。

（悲しくて明るい場所）

†

歴史と、私の想像力は、ごく自然に、自分がいかに卑怯に振る舞うかを示唆している。卑怯でない人も、世間にはいるのだろうが、それはごく例外で、突出した存在なのである。自分も相手も傷つかないで解決できる程度の紛争なら、それは明らかに戦争ではないし、もしかすると紛争とさえいえないのではないかと思う。

それなのに、「お互いに平和を願えば平和になる」などという安易な考え方に、どうして安心していられるのだろうか。

人間は途方もなく弱く卑怯である。しかし時には、アンデスで子供を失った医師のように、人間ばなれした崇高さを持つこともある。ただそのいずれの場合も、深い深い傷を負い、命の犠牲を代償にしている。

まともに見られないほどの卑怯さと、息を飲むほどの崇高さと、その双方を共に人間の中に信じるからこそ、最大のドラマであり、私にとっては現世での最大の感動だったよう

な気がする。

その二つの極限の絶望と希望との双方を見せてくれたものが、信仰と戦争の二つであった。その二つは共に私の人生の師であった。私はその二つに深く感謝しているのである。

(悲しくて明るい場所)

†

旅行は必ず危険が伴う。旅行だけではない。総てのものは、出費、労力、疲労、時間の消費、心労などの代価を必要とする、危険もまたその代価の一つである。代価を払わない人は何一つ手に入れることができない。それが高いものか安いものかを判断するのは、その当人以外にない。

だから、危険の要素のない生活をしろ、というのは、ほんとうの意味で生きるな、というに等しい、と私は思っている。

(夜明けの新聞の匂い)

†

私が初めて東南アジアに出たのは、二十五歳の時のことで、それが私の東南アジアに溺れるスタート点になった。

それだけでなく、爾来、私の中には、いかに日本は外国と違うかという一蹴の恐怖や、人間にとって生きるに値する生涯というものは、もしかすると苦難と生命の危険を伴うも

のなのだという一種の「危険思想」や、主観的幸福はあっても客観的幸福というものは幻影でしかない、という思いだのが、まるでできの悪いおじやのように、ごちゃまぜになつてそれでも醗酵し続けていたのである。

（神さま、それをお望みですか）

†

僕は山に見える所が好きだったんです。寒さも雪も厳しいんですけど、厳しさがなくところでは、人間は健全な心を保てないような気もしていました。厳しいと、人間にはむしろ生きる気力が湧くんです。

（ブリュウゲルの家族）

†

私は生きている間だけ、どうにか暮らせればいいのです。正直言つて、私は日本の未来にも地球の運命にも大して関心ありません。もし地球でも、人間でも、生き延びるものなら、かなり放つておいても、運命は生きる方に向かうでしょうし、だめなものならどうしてもだめなのではないか、と思います。それに、こんなことを大きな声では言えませんが、私は利己主義者ですから、自分の死んだ後のことなんかどうなったって平気なのです。まどか円まどかの行く末だってほんとうは大して気にしていません。

（ブリュウゲルの家族）

†

「もう若くはないんですけど」